予告篇

SOUCAINA 10

スウカイナ 10 号

目 次

沖永良部でのスケッチ　2

洋梨の味について　5

インド砂漠紀行　7

3　デリーの一日　7

4、ジョドプールの夜　10

5　赤い花のカクタス　12

6　ハワユー踊り　14

●荒木悠之

沖永良部でのスケッチ

血を吸った黄色い砂のような珊瑚が見える
フェリーボートはぶるぶると震えながら 硬い水面を割り 不意に減速を始め
ぼくたちは油臭いデッキで 陸に積まれたセメントの袋を眺めた
なだらかな丘では琉球松が指を揺らしている
トルコ石の指輪をはめた無数の指が きらりきらりと揺れる
桟橋では エメラルドグリーンの水際に沈んでいるいくつかの巨大な鉄球
赤い花びらとして散らばる砂糖黍の葉ずれの音
目と赤土と砂状に散る鋭い葉の混成する茂み
群生する低木の上で 銀色に眠っている夏の午後に

和泊港から街区へ向かう道路を黄色い魚が横断していた
西日に灼かれているガラスの墓地へ黄色い魚は向かっていた
ぼくのリュックサックいっぱいに詰まっているスポンジのように軽い肢体を
魚はくねらせる ゆっくりとした動き
シベリアの川のように滑らかに流れている道路を魚は渡っていった

ホテルの部屋でぼくはリュックサックからスポンジを出し
菱形の窓の際や　ぶよぶよのサイドテーブルの上に並べる
つるつるしたスポンジは次から次へとザックの口から吐き出され
花柄の部屋中を満たす
スポンジは空気中の水分を吸ってすぐにぐったりする

（カモメたちも空を飛び回るだけで瞬く間に歳をとってしまう）

係長がぼくの部屋に来て　すぐに田毎岬に行こうと言うので
ぼくたちはホテルから国道まで　魚のようにゆるゆると歩き
「カー」と書いた割れた看板が目立つレンタカー屋で
ボディの下部に錆の浮き出た海老色のブルー　バードを借りて　滑らかに流れている舗装道路を
ギシギシとクラッチを踏んで
尖った鉛筆を思わせるかなりの速度で走る
黒糖酒の工場の眩しく白い外壁に　みずみずしい皮膚のつる草が絡まるさまや
乾燥したお花畑のある人家
白い畑地を取り囲む　潅木域のブルーの葉叢が
考え事をしている少女の目のようにさやさやと動くのを見て
ぼくたちは緩くて短い坂を登ったり降りたりしていった

（赤い花の内部には白い猫が眠るものです）
（歩道橋の上はいつも髪を濡らした子供たちで鈴なりだ）

リンゲル液で洗ったばかりの 清潔な灯台の下に車を停めると
薄青い日暮れの東シナ海が見える
早足で誰もいない草地を降りていく係長の 濡れたワイシャツを追いかけるようにして
ぼくも崖の際に立って 軟らかな鉄のように凪いだ海の上に船を捜したが
海は臍のない腹部のように 疵一つなく滑らかに盛り上がり
果てしなく生暖かく左右に広がり
甘く低い草笛で ぼくと係長を呼んでいるかのようだ

（無限とは行き止まりのことです）とエメラルドブルーの魚がしゃべっている
日没後すぐに満月があがり その明るい青い魚のお刺身を食べるために
銀の海に照らされた 明るく流れる国道を ぼくたちはブルー バードで走る

（田毎中学のきらきらと砂の光る校庭で そろいの黒いズボンをはいた男の子たちが輪になり
手をつないでくるくると回り カモメカモメ おいでおいでと 口笛を吹いたり歌ったり あなたたちは誰なのですかと 繰り返しささやいてみたりするうちに めまぐるしく時間がたっていく）

洋梨の味について

黄緑色の皮膚の老人は 黒パンと生ハムとミルクコーヒーの 朝食を済ませ 桃色の毛糸玉のような朝の光りを浴びて 編んだ椰子の葉のソファーにゆったりと横たわり 夢の続きを見ることにした・・

「四方流れの屋根の家には 仲のよい両親と 二人の姉妹と針金の髪の弟が住んでいました
私は姉妹の誰かに会うために 引き違い戸の門をくぐり 玉砂利を踏んで母屋に向かっていました 踏み切りの音がひどく近くに聞こえたのに驚いて 私は立ち止まって楠の暗い葉群を見上げました」

気がつくと老人は洋梨の実る園にいた
林苑を抜けると芝生がみずみずしく広がり
なだらかな傾斜地を上り詰めたところに 尖った金色の屋根の園丁があり
園丁の前には二人の少女と 銀髪を猛々しく立てた男の児が 若木の杭のように真っ直ぐ立っていた

三人のアーモンド形の目に射すくめられて　立ち尽くしている老人にぼくは近づいていって
下膨れの頬の皮膚を　アルミニウムの果物ナイフでめくると
みずみずしく透き通る果肉が現れた

果肉を口に含むと　明るい朝を思わせる甘みが口に広がり
その甘みは　たとえば黄緑色の皮膚の老人のゆったりとした動作を思わせる豊かな味で
老人はミルクコーヒーを飲んで黒パンと生ハムの朝食を始める

インド砂漠紀行

松原牧子

3　デリーの一日

朝だ。明るくなっている。3月27日、インドはじめての朝。まだ暗いうち、イスラム教徒の祈る声が遠く聞こえた。インドネシアのジョクジャカルタでも聞いた。ああ聞こえている・・・と思っているうちにまた眠ってしまった。着替えて小さなベランダに出る。手すりに鳥の糞がたくさん落ちている。今日の天気は晴れ。鳥がたくさん、スズメ、インコ、ハト、トンビ、頭がボサボサの鳥、さえずりも姿もさまざま。犬、猫が鳴いている。何か叩く音、車、風が吹いている。部屋は5階か6階だった。そこから見える世界、空、聞こえてくる音、吹いてくる風・・インドだ、これがインドだと感無量、胸が熱くなってくる。下をのぞくとホテルの裏庭、朝日をあびてホテル従業員らしき男たちがのんびり話している。地面におかれたシーツらしきものに小

犬が3匹、かじったり潜ったり夢中になっている。男たちがそれを見て笑う。放し飼いの鶏をこっそり猫が狙っている。空ではトンビがハトを追い回す。　朝食はホテルのレストラン。ベジタリアンブレックファーストを頼む。マサラドーサ、それをつけるためのソース（チャツネ・・ココナツ、ジンジャー、グリーンチリがはいっていて辛い）、ベジタブルカツレツ（野菜コロッケ）、マンゴージュース、コーヒー。（この時はまだコーヒーを飲んでいた。チャイのおいしさを知らなかったのだ。）マサラドーサと言うのはちょっとパリッとしたクレープでカレー味のポテトを包んだもの。これはどこで食べてもおいしかった。桑はナンを揚げたものをとった。カルメ焼きと同じ、ふくらんでいるが中は空洞である。どれもおいしい。石は料理の写真を撮る。考えてみると料理だけの写真を撮ったのはこの時だけかもしれない。まだ余裕があったということか。

10時過ぎにチェックアウト、ニューデリー駅に向かう。4月4日のアーグラ行きの列車のチケットを買う。ついでに荷物を預けて身軽にデリーを観光しよう、夕方ジョドプール行きの飛行機に乗るまで時間がある、と我々は思っていた。

ホテルの前からオートリクシャに乗る。オートリク

シャは小型自動三輪の後部を改造、二人分の座席を作ったもの。この旅でいちばんよく利用した交通手段だ。ホテルの前などには何台もいて、旅行者が出てゆくとすぐ寄ってきて乗れ乗れとしつこい。この時すぐ乗ってはいけない。初めにどこまで何人、いくらと取り決める。高すぎると思ったら値切る。嫌だと思ったらやめる。青は慣れているし見た目からしてボスなので、こういう交渉は全部彼がした。だいたい5人で2台、組み合わせは色々だったが、女性二人で一台ということはしなかった（私たち可愛いから心配で）。5人で一台ということもよくあった。そういうときは一人が運転席横、3人が座席、もう一人はその足元という具合。しかしちゃんと取り決めて乗っても小さなトラブルがあって緊張する。

この時もそうだった。すぐ駅に着くと思っていたら、いつのまにか旅行関係のオフィスにつれていかれてしまった。途中気づいた青が「駅に行くんだ！」と叫び抵抗したが、壮絶というしかないような交通事情の中、逃げようもない。信号はめったにない。バス、トラックのうしろなどに「車間距離を守ろう」と書いてあるのだが、その字にすぐ触れそうな距離で、各種自動車、オートリクシャ、バイク、サイクルリクシャ、自転車、歩く牛、寝る牛、人間が全速力で走り、割り込み、追い越し、横切る。排気ガス、排泄物出し放題。オートリクシャはドアがないので転がり落ちないよう脚を踏ん張り身を守らねばならない。よく事故にならないものだ。オフィスに着くやたちまち男が出てきて青に、チケットを買え、ツアーを組もうなどと言う。青は「駅に行け、ここに用はない！」と口角泡を飛ばす。残りの4人は手持ち無沙汰、ボンヤリしているしかない。後に思うに、そうして客をつれていくとなにがしかコミッションが入るシステムになっていたのだろう。オフィス男とリクシャワラー（リクシャの運転手）はやがてあきらめ、我々もやっとニューデリー駅に行くことができた。

荷物一時預所では3、４０分待たされた。預所は駅構内にあり、入るとき改札口で検札などしない。構内は旅人、商人、住人らしき人々でごった返している。数人並んでいただけなのに長く待たされ、１日１個３ルピーを払って書類を書くと中に入れとの指示。中には鉄枠の棚が暗い部屋いっぱいに組み

立てられていて、その好きなところに置けと言うことらしい。受取口からは人が次々入ってきて荷物を持ってゆく。ここではたぶん他人の荷物を持っていくことも中をあさることも可能だ。その事態が飲み込めて初めて、預け口に鍵、チェーンを売る男のいた意味が分かる。荷物をチェーンで括り鍵を掛けて自衛せよと言うことなのだ。しかしいまさらチェーンなど買う気にもならず、なるべく人の手が届かないところに置こうと棚に上り、奥のほうに荷物を押し込む（ガイドブックにはインド旅行に鍵とチェーンは必須、と書いてあった。知ったのは帰国後のこと）。さて、その後2階の外人用窓口でチケットを買う。扇風機の回る暑い部屋で1時間、じっと待つ。

チケットを買うと、もう13時前。昼食にしようということになり、駅から1Km程先のコンノートプレイスにある青行きつけのレストランに行く。かつてイギリスが建設したニューデリーの、その中心に当たるのがコンノートプレイス。道が三重円になっていて、町の多くの道がそこへ集中している。ヴィクトリア女王の息子、コンノートの名を付したその街には大柄な白人女性のような堂々とした建物が並んでいる。高級レストラン、各種オフィス、銀行、航空会社などが入っている。映画館もあって、看板を見た。青は久しぶりのせいか迷い、その迷う青のあとを4人は右往左往。街中ではあるが大樹があり、インド菩提樹の葉が繁って美しく、思わず立ち止まって幹に触り、また皆の後を追う。皆は暑さ、騒音に次第に疲れてくる。見知らぬ街ををひたすら歩き、やっと目当てのレストランに着く。ユナイテッド・コーヒー・ハウスに入ってびっくり、中は真っ暗であった。

インドでは中が暗く、入り口にドアマンが立っているのが高級レストランの印だ。ユナイテッド・コーヒーはそんな店、クーラーがガンガンに効いている。私はその日度付きサングラスをしていた。この旅行のために新調したもの、インドの強い日差しと砂ぼこりに備え、色はかなり濃い。それで薄暗い店に入ったのだから真っ暗になるのは当然のこと。しかしはずすと視力0・1未満、乱視もあるので料理を確かめるにも顔を寄せるありさま、かけると真っ暗、実に困った。室内を暗くするのは外の光の激しさに対するサービスかもしれない。その光のせいかインドには白内障の人が多いとか、そういえば後で数人、目の見えない人に出会った。

昼食はナン、カリー（卵、ヨーグルト味）、チーズとトマトのグリルドサンド、フライドライス（炒飯）、タンドールチキン、スプリングロール、ラッシー、マサラティ、赤いミニ玉葱の甘酢漬と辛いしょっぱい漬物（付

け合わせ)。分け合って食べる。おすすめは卵カリー、カレースープとゆで卵が絶妙に合って、辛くなくおいしい、ぜひご家庭でお試しあれ。その後あちこちで食べたが外れということがなかった。ラッシーはヨーグルト入り牛乳、マサラティは各種スパイスの入ったミルクティ。これはいつでもおいしくて、その後チャイと共に私の命綱となった。石はマサラティのスパイスがどうしても体に合わないと言う。人それぞれ、石の命綱はビール、毎晩飲んでいたが、それが飲めない日がこようとは神のみぞ知る・・であった。食後ライムを浮かべた銀の器が出た、指先を洗うものである。青から左手を使ってはいけないと注意されていたが、右手だけで食べるのは至難の技。こっそりサングラス越しに回りを観察したら結構左手を使っている。なーんだ使っているじゃないか、ちょっとホッとする。

昼食を終えると何と15時前、もう空港に行かなくてはならない時間だ。駅に戻り2、3時間前に預けた荷物を再び30分ほど待って取り出した。食事のためだけに預けたわけではないのに。いったい私たち何をしているのだろう。その上この日買ったチケットは結局使わずに終わった。アーグラにあるタージマハール、美しい妃の死を悲しんで建てられた白い大理石の墓が見たかったなあ。観光地と言われるところへ行くのは全行程中この日だけだったのになあ。とにかくインドでは何をするにも時間がかかるのだ、そして予期せぬことが起きるのだ、それがインドなのだとつくづくわかる。タクシーで空港へ行く。待合室で少年が売っていた5ルピーのネスカフェが熱く甘く体にしみわたる。皆疲れ、放心している。17時10分発ＩＣ４９３便、ラジャスタン州の州都ジャイプール、目的地ジョドプールを経由し、ウダイプールまで飛ぶインド国内航空。ジョドプール着は19時5分であった。

4、ジョドプールの夜

ラジャスタン州にはマハラジャがいる。宮殿があり、一面砂漠色の世界に原色シルクのサリーがひらめく。その衣擦れの音、ゴールドの装飾品。透かし彫りの石の壁から青い月の光が漏れ、楽の音に昔話がよみがえる。砂漠はただの乾燥した荒地ではない。人間の悲喜こもごもの歴史ばかりか、太古の生物の姿さえ見えてくる。いよいよその砂漠地帯に足を踏み入れる。ジョドプールは日

本とほぼ同じ面積を持つインドタール砂漠の入り口にある街だ。ある本によると「1年に3回しか雨が降らない」また「ジョドプールでは7年間雨が降らないこともあったそうだ」とある。現在の当地のマハラジャ、ガジュ・シンⅡ世は次のように語る。

「ラジャスタン州はその英雄伝と騎士道精神、素晴らしい遺跡、楽しい民話や魅惑的な音楽、活気あふれる人々のためにインドに数ある州のうち最も華やかであると言われています。ジョドプールは1459年祖先のラオ・ジョダによって創建されました。州で2番目に大きな都市として州の公務に重要な位置を占め、多くの人々に州の文化的首都とみなされています。」

（「夢かマハラジャ」内山澄夫　朝日新聞社）

「ラジャスタン」というのは「ラージプート（王の子）の国」という意味。かつてイスラム勢力がインドに攻め込んだとき、とても勇敢に戦ったというヒンドゥ の戦士、ラージプート族の本拠地だ。彼らはこの地に幾つもの国を興し、その王、マハラジャとして君臨した。現在そのような藩国はなくなってしまったが、各地王族の子孫達が今なおその地のマハラジャとして生き続けている。王族たちが作り上げた遺跡、文化が息づく地。

後日遠くジャイサルメールからジープで戻ってきたとき、一面カーキ色、土漠の世界からジョドプールに入ってきて、何という緑みずみずしい、美しい、生き返るような街だろうと思った。オアシスの街。デリーから着いたその夜、さわさわと風が吹き、ホテル中庭の灯は揺れた。大樹に囲まれたひんやりした地面、茅葺きのあずまやで私たちは食事をした。国産ビールにあわあわと酔い、すると庭の外れから音楽が流れてくる。楽師がいる。地面に直に座り、弦楽器を奏で唄う。時々隣に座る妻らしき女性が高く合いの手を入れる。その横に布にくるまれて赤ん坊が寝かされている。美しくはかなく哀切な響き。楽師が唄いながらあずまやに来て楽器を見せ、触らせてくれる。ラマナタという楽器、楽師の父の手作り、ココナツ、竹、スチール弦で作られている。触るとシャリン、シャラリンと音がこぼれる。桑いわくギターと津軽三味線を合わせたような、それよりもっと高くはかない音ねえ。楽師は次第に興に乗り、ホテル従業員らしき男も出てきて共に唄い、踊り、楽師は弾きながらぐるぐる回る。赤ん坊はとうとう目を覚まさなかった。デザートに小さな丸い団子のようなものが出て、それは

あまりに甘くて、一個を食べきれないのだった。シャワーを浴び寝支度を終えてから、部屋の前の吹き抜けの廊下に出た。籐椅子を手すりのところまで寄せて暗い夜を眺める。風は吹き来たり、吹き過ぎ、木々はざわざわと揺れ、鳥なのか動物なのか、どこかで何かが鳴いた。

5　赤い花のカクタス

三日目の朝が来た。3月28日。また来た朝だが、ジョドプール初めての朝。毎日初めてのことばかり、それが旅。朝食前に近所を散歩する。普通の家ばかり、ほうきを売っている家もあった。人々は売られていたのと同じようなほうきで家の前を掃除している。犬、猫、山羊、ラクダ・・思い思いに眠ったり歩いたり、人間と同じ存在感で行動している。ふいに藪から豚の親子が飛び出してくる、野生だろうか。パキスタンとの国境が近いせいか、広い軍事施設のようなものがあって立入禁止となっている。町に向かって時おり小型トラックなどが行く。すると一面の土ぼこりとなる。

朝食はホテルの食堂で。トーストは小さく薄く、厨房で焼いて持ってきてくれる、その焦げ目は直火で焼いたもの。テーブルの上に黒い粉があり、匂いでインスタントコーヒーだと分かる。ポットのお湯を注いで飲めということらしい。チャイはポットにたっぷり熱い。サービスしてくれるボーイさんも他の従業員も男性ばかり、オレンジ色のターバンにゆったりした白いシャツとズボン、ゆっくり、にっこり、のどかである。シリアルにピッチャーのミルクをかけて食べていると青いわく、よく喰うなあ、そんなもん人間の喰うもんじゃねえ。そうだろうかパリパリと食べながらオートミールを思う。むきになって食べ続けたことがあるが、どうしてもおいしいとは思えなかったな。さて今日は一日ジョドプール観光だ。晴れている。日焼け止めを塗り、冷房対策もかねて長袖の薄いカーディガンを持つ。サングラス、帽子は欠かせない。桑は日傘を持つ。一人一本のミネラルウオーターも必須。準備万端整えて5人そろってタクシーに乗り込む。

まず丘の上のマハラジャの宮殿に行く。一部、ウマイド・バワンホテルとして開放されているが五つ星のホテル、とても我々には泊まれない。現在ガジュ・シンⅡ世が住み、左右195m、奥行き130mの豪邸、壁も天井も壮麗、代々のコレクションが展示されている。兵士のような男性の説明を受けながらゆっくり見学する。高

い天井のあたり、スズメがチュンチュン出入りしている。時計、陶磁器、金銀ガラスの器、大きな花瓶、刀剣類、中には日本製と思われる物もある。部屋に置いたのだろうトイレの数々が形、模様さまざまで楽しい。素敵なレストランがある。泊まるのは無理としても、せめて今夜のディナーはここで、と5人の意見はすぐまとまる。広い前庭にはブーゲンビリアをはじめとして色とりどり花が咲いている。インド人観光客も多く、緑の芝生、木々の間をサリーが鮮やかだ。可愛い女の子と手を振ったりしていると、その父親が声をかけてくる。いわく結婚しているのか、子供はいるのか等。その十人の家族と楽しく写真を撮る。そういえば今朝の食堂にマハラジャとその一族の写真が飾られていた。その説明をするボーイさんの表情、語り口からマハラジャへの親愛の情がこぼれ、今もマハラジャが敬愛の対象となっていることがわかる。帰国後、ラジャスタン各地の王族たちの写真を見た。皆、堂々と気品にあふれ、誇り高く美しかった。砂漠の王国のロマンが今も生きている。

次は遺跡公園マンドール。マールワール王国（ジョドプールが王国であったころの名）の首都があった場所。オアシスの地。マールワールは「死の土地」という意味、なぜそんな名がついたのか。タール砂漠は「死の砂漠」と言われたそうだから、そのせいかもしれない。現在の街の中心地から北へ10Km。タクシーを降りると公園の入り口で大きな牛がはてしなく糞をしている。その横をそっと通って中に入ると、大樹茂りいたるところリスがいる。小中学生らしい制服の子供たちが先生に引率され、楽しそうに歩いている。大樹、サボテン、石の建物の間をずっとゆくと、行き止まりは崖だ。そのあたりで少年、青年の二人組が現れ、案内を申し出た。その二人に従って崖を登ってゆくと、上には荒れ地が広がっていた。ピンクの砂岩、固い土、瓦礫を踏んですすむ。とげのある木は要注意、それでもあちこちひっかき傷ができてしまう。ナスのような紫の花、小さな赤い花を無数につけたサボテン。藪のなか、見知らぬ荒れ地色の鳥がゆっくり歩いて姿を消す。かなり歩いて後、少年が「テンプル」と指さす。王族たちの墓だ。ヒンズー教では普通墓はつくらない。しかしクシャトリヤの一部、特に王族には町外れに菩提所をつくる習慣があったという。チャハットリー、屋根と柱だけの建物、僧侶もいない、遺骨もない。象にどこか似た形の建物が荒れ地に並んでいるだけ。

公園に戻るとサルの群れが出てきている。大型、灰色

の神猿、ハヌマンラングーン、ヒンズー寺院で大切にされている猿だ。小猿も多く悪さはしないようだが、近づくとちょっと恐い。目を合わさないようにする（類人猿の世界ではじっと見るのはケンカを売ることだもの）。パパイヤの木の上でリスがハウリングしている。大きく鳴くものがいて何かと思ったらリス、びっくりした。少年たちには当然のチップを渡し、別れた。赤い花のサボテンの名を尋ねると少年はただ「カクタス（サボテン）」と答えるばかり。日本に戻ってから調べたがわからない。熱帯、砂漠地帯の植物の名は調べてもわからないことが多く、残念。

6　ハワユー踊り

マンドールからジョドプール旧市街の中心地サルダルマーケットへ行く。どのような手段で行ったのか覚えていない。石はオートリキシャで行ったと言う。青に聞くと朝からのタクシーにまた乗った、サルダルマーケットで乗り捨てた。記憶って実にいいかげんだ。もう昼だ。サルダル通りの食堂に入る。吹き抜けの店、青いわく、この辺りではまあまあましな店だ（あとは屋台しかなかったから）。ダル豆のカリー、卵カリー、チキンカリー、ナン、コーラ。私には卵カリーがおいしかった、あとはとても辛い。ナンの生地が丸めて台の上に置かれている。注文にしたがってそれをちぎり焼く。その生地をスズメが来てはつついている。大胆にも生地の上にとまってつつく奴もいる。それを見て私は（実は桑も）心が穏やかでない。街中動物たちは勝手に歩き、排泄し、人間が唾も吐くだろう。下水はほとんどドブだ。何やらわからぬゴミもたくさん。それらの上を飛び、とまり、何かしらつついてきたスズメがナンの上にとまりつつく。それを我々が食べる。スズメだけではない。ハエもいる。手の上、皿の上、カリーの上、追っても逃げない。店の人は私たちは決して飲んではいけないという水道水で手を洗い、黒ずんだ布で拭く。コーラのストローは新しいものだろうか。ハエはどこから来たのか、電子顕微鏡で見たその手足はどんなだったか、など気にしはじめると何もかも気になって、実は桑も同じ思いでいたと後になって語った。しかし、ここでこの世界でインドの人々は普通に生きているのだ。そのように私たちもここに普通にあればいいのだと我が身に思い聞かせる。暑さのせいか皆小食であった。他のお客さんのところに運ばれてゆく料理はいろいろでそれを見るのは楽しかった。

食事後、サルダルマーケットの後ろにそびえるメヘランガル砦に登る。ジョドプールの公的な城、１２０ｍの

赤い崖の上にちょうど城の頂上がある。向かいの丘にマハラジャの宮殿があり、この二つの丘の間に街は発達した。坂を上ってゆくと石垣の間、リスが素早く動く。白い漆喰を塗った家にサリーを着た女性たちがいて、その中の年配の女性が「上のほうにゆくと声をかけてくる男がいるけど、ついていったり家の中に入ったりしてはだめよ。危険な男なの。」と忠告してくれる。さらに坂を上りいくつも門をくぐり、やっと頂上に着く。大砲がいくつも市街に向けて据えられている。端に柵などなく、ゾクゾクしながら下をのぞく。街は一面のブルー、ジョドプールが青の街（ＢＬＵＥ　ＣＩＴＹ）と言われるのはこのせいなのだ。どの建物も城に向かう側の壁はすべて青く塗られている。なぜだろう、マハラジャの好きな色だったのか。砂漠のなかの水の色、空の色。その青い街の上空をタカ、ワシの類が悠然と舞い、砦の崖にある巣に戻ってくる。イワツバメもたくさん。真下に小さくサルダルマーケットの時計塔が見える。向こう側の丘に宮殿。

戻る途中、ミュージアム（博物館）があり見学する。建物の随所に石の透かし彫りの壁があって、細工は細かく美しく、どれほどの年月と人手がかかったことだろう。売店で絵はがき、小さなインドの鳥の図鑑を買う。山は東京で待っている小さな娘のために、赤い布の刺しゅうされた可愛い靴を買う。ミュージアムのレストランでチャイを飲む。チャイはいつ飲んでも、甘く熱くおいしい。きっとインドの気候に合っているのだな。少し離れたところにあるトイレの階段を上がると蜂の死骸が落ちてくる。上に大きな蜂の巣があって（スズメバチ？）、ワンワン飛んでいる、恐い。急いで用を足し出てくると男性が入ってくる。表示を見直すと男性用に入ってしまったらしい。何ということだ。石造りの暗いトイレ、もちろんペーパーはない、インド方式であった。

砦のあちこちから音楽が聞こえ、石造りの建物に響いて心がわくわくする。いつまでも聴いていたい。最後の門を出て街への道を下っていると、いつのまにか小さな少年たちが集まってきて口々に「ハワユー ハワユー」と声をかけてくる。私も「ハワユー ハワユー」と返事をして一人ずつ握手しているうちに、それは歌になり踊りになり「ハワユー ハワユー」と足を組み手をつなぎ、坂を駆け降りながらの「ハワユー踊り」となった。目ばかりキラキラさせた裸

足の少年たちと跳び歌い踊って、それはいいようもなく楽しく解放されたひとときだった。

砦の下の街並みは入り組んでいて牛、山羊、犬、ラクダなど好き勝手にうろついている。子供が下水にお尻をむき出しにしてしゃがんでいる。動物も人間もする事は同じだ。気をつけていてもつい糞を踏んでしまうのだなあ。時計塔の前、牛たちが二列になって何十頭も寝ていた。砦から戻ってみると牛たちはどこかに散って、一頭のみ残っていた。死んでいる牛。なぜそこに集まるのかその時はわからなかったが、後で写真を見てわかった。石畳の中、そこだけ土が出ていた。動物はやっぱり土が好きなのだな。

マーケットにはたくさんの店が出ている。テントの屋根、地べたに物が並べられ、屋台もある。サンダルは古タイヤからつくる。衣服、布、穀物、野菜、果物、菓子、籠、雑貨。菩提樹の木陰で床屋さんが髪を刈っている最中。根元に割れた鏡の破片が立てかけられ、白黒まだらに切られた髪がたまっていた。床屋さん、そのお客さん、いろいろな人とアイコンタクトをし、笑いあう。人出は多い。

ホテルに戻ってプールサイドではがきを書く。ホテルは街の喧騒から遠く離れ、静かだ。ユーカリ、ニームの大樹。どこからか木の花が散ってくる。ブラシの木の赤い花、紫のタイワンアサガオ、ブーゲンビリア、ジャスミン。あおあおした芝生に囲まれたプールで桑が泳ぐ。西洋系の人に英語で話しかけられて笑っている。夕暮れの空をゆく光る雲、ふいにクジャクがあらわれる。カルニバワンホテル、静かな安らぎに満ちたホテル。

宮殿でのディナーは豪勢だった。マハラジャブランドのビール、シタールとドラムの演奏も聴いた。帰り売店でグリーンの美しいシルクのブラウスを買った。自分自身のおみやげ。おそろいのパンツはウエストが細すぎて入らなかった。インド女性のウエストはこんなにも細いのか。5人は満足し満腹し、ホテルまでの道をのんびり、お喋りしながら歩いた。幸せな夜。しかしその時他の4人は知らなかったが、すでに青の下痢が始まっていた。

（続）

11月初めの連休に発行の予定でしたが、私の原稿が仕上がらず少しおくれます。今日も書こうとしていたのですが、PDFで遊んでしまってできませんでした。ちょっとはきれいな縦書きが見れるようになったのでは。しかし、Expand Bookのほうが見易いのではと思ったりしたのですが、なにしろ版下作成と兼ねられるメリットがあるので、、、、。
それにしてもこの連休は、なんだったのか。

昨日は、渋谷で黒沢明の「野良犬」を見て、後悔することしきりでした。黒沢の映画はあまり見てなかったので、この際と行ったのですが、ビデオで十分なような気がしました。最近はあまり見たい映画がないなという印象です。ゴダールの『中国女』見ました。相米慎二が久しぶりに出したものは、見に行くかなと思ってます。

注目は、黒沢清、アルノー・デプレシャン、青山真治の線分なんでしょうか？　冷たい血は良かった。

そんなわけで、『襞』は物質的で分かりやすいですね。